

〈特集と尼崎〉

尼崎におけるネオ・フォークロア

—— 町工場の語り部に学ぶ ——

森 隆 男

1 はじめに

尼崎市は、昭和61年の市制70周年を機に「近松の町あまがさき」を標榜し、文化振興のためにさまざまな運動や行事を展開してきた。

それに加えて、平成5年3月、尼崎市文化懇話会提言のなかで、「尼崎ネオ・フォークロア（新しい物語）の構築」のための運動の実施が提案された。

この運動は、民俗学の創始者の柳田國男が農山村を中心に集めた口頭伝承を、都市において集めようとするものであり、明治以前の古い話だけでなく、近代以降の都市の発展のなかで生まれてきた話、言い伝え等を発掘し、集積することによって、市民の社会生活史を描き出し、文化振興に役立てることを目的とするものである。近松門左衛門は世間のさまざまな事件があると、現地に行って取材し、それを材料に戯曲を書いた。いわばこの「現地取材」「聞き書き」の方法をまねて、市民のなかいきづく、身近のできごと、思い出、事件、喜怒哀楽を記録していく運動である。

この運動の展開に先がけて、ネオ・フォークロア運動の理論的整理、実践での方法の確立等を目的として、あまがさき未来協会が、平成5年度から、自主研究調査「尼崎におけるネオ・フォークロアに関する研究」に取り組んでいる。

この研究は、ネオ・フォークロア運動の提唱者でもある未来協会まちづくり研究所の研究委員米山俊直氏（現、放送大学教授、京都大学名誉教授）を座長として、大学の研究者、尼崎市職員、未来協会職員の合計13人で進めている。

この研究のなかで、ネオ・フォークロア運動の実践として、我々はいくつかの収集方法を試みている。例えば、民話、伝説などの書物の収集、「聞かせて庄下川の今昔」と題しての思い出話等の募集（自記式郵送方式）、小学生から大学生

までを対象とした「口裂け女」「人面犬」「トイレにいる花子さん」など若い人たちの間で話されるうわさ話のアンケート調査、そして、古老に聞く昔話などの聞き書き調査である。

この聞き書き調査については、いろいろな分野や事項が想定されたが、まず、産業分野別（農業、漁業、工業、商業）に行ってみることとした。ここで報告するものは、私が工業分野を担当して調査した結果である。

今後、これらの実践を通じて、ネオ・フォークロア運動の理論的組立と方法論の確立をめざすことになるが、ここでは、その素材となる調査結果について報告することとする。

2 鋳物業を営む町工場

工業分野の聞き書き調査の対象として、自動車や電化製品などのモノづくりに欠かせない鋳物業を選んだ。訪問先は尼崎市内の工場の多くを占める町工場である。本稿はその聞き書き調査に若干のコメントを加えてまとめたものである。

話手は市内神崎町で父の代より鋳物工場を経営している笹部一郎氏で、昭和18年に当地で誕生した。現在、工場の隣接地に家族とともに住んでいる。私は一日の労働を終えてくつろぐ笹部氏を数回にわたって訪ね、また鋳型に溶解した金属を流し込む作業を見学しながら、町工場の現状や厳しい経済情勢の中で生き抜いてきた秘訣等について語ってもらった。

なお神崎町の位置する小田地区は、従業員数が1～9人の小零細企業が密集する工場と住居の混合地域である。

まず笹部氏と工場の歴史について簡単に紹介しておきたい。

朝鮮戦争が終わった頃、父太一郎氏（大正3年生）が20年間勤めた鋳物工場を辞めて独立し、自宅の土間の一室を仕事場として事業を始めた。事業は順調に発展し、従業員も雇うようになった。この頃、部品等の運搬手段が自転車からミゼットへと変わった。笹部氏は長男であったこともあり、父の事業を継ぐ決心をして見習いを始めた。

技術の習得は、先輩の職人が行う作業の様子を見て覚えるというまさに徒弟制度そのものである。最初の5年間は、「坊主」と呼ばれて簡単な部品をつくる作

業に従事し、自分の小遣い程度を稼げればよいとされる。20年ほど習練を積むとどんな注文にも対応できる技術が身につき、さらに自分で工夫することができるようになる。この段階になると鋳物職人としての誇りを持って仕事に従事し、仕事の面白さが分かるという。

昭和43年、父太郎氏が脳血栓で倒れ、会社経営の責任も負うことになった。笹部氏25歳の時のことである。これを機会にプラスチック製品を生産する業種に転換する計画を立てたが、家族の反対にあって結局鋳物業を存続させ、現在に至っている。

3 町工場が生き残る秘訣

「昔は市内に20社ほどあった同業者も、今はうちもいれて数社あるだけですわ」
 経済情勢に連動して倒産や転出など激しい動きがあったことは推測できるが、そのような流れの中で、どうして笹部氏の会社が存続できたのか。私が最初に興味を持ったのはこの点である。笹部氏は次のように答えた。

まず当然のことながら経営者として経済の動向を把握しておくことが要求される。そのためにテレビや新聞等からの情報収集は欠かすことができない。

技術に関する情報は自分で積極的に学ぶほか、同じ鋳物業の仲間と新しい技術の情報を交換してお互いに助け合う。ライバルではあるが、良い仲間であることが必要である。

また関連する業者間での信頼関係は不可欠である。そこでは社長の人柄が問題となる。ちなみに社長として求められる人柄は「鈍」であるという。これは目先の利潤にこだわらないという点で鈍い人という意味であり、人としての器の大きさということになるろう。

さて、以上述べたことはタテマエに属する部分であろう。ホンネの部分ではどのような秘訣があるのだろうか。執拗に再度聞いてみた。

(1) したたかさ

「町工場の社長は、したたかやなかったらやっていかれまへんで」

この業界では親工場から木型を製作する工場、そして鋳物工場、仕上げの工場を経て再び親工場へと仕事の流れる連鎖関係が形成されている。つまり親工場で

ある大企業がすべて取り仕切っているわけではない。笹部氏の経営する会社では木型や、鋳型の材料、インゴットの仕入先はもちろん、型取りをした部品を仕上げる納品先はいずれも複数の業者の中から選ぶ。価額や技術等を考慮して複数の取引先と交渉し、最も有利な業者と契約をすることになる。町工場の製品は約8割を人件費が占めるという。価額の交渉に当たっては人件費に工場の維持費を加えた金額を基に交渉することになる。いずれにしても取引相手の固定化を避け、他の工場の経営状況の影響を直接受けないようにしておくことが秘訣ということになる。

また経営の「身軽さ」も大きな武器となる。笹部氏の工場は現在、社長である本人と2人の従業員、そして必要に応じて夫人が手伝うことにより仕事をこなしている。従業員の家族の生活を保障することが雇い主の責任であるが、その点では3家族分の収入を確保すればいいことになる。かつては笹部氏の弟も手伝っていたように、家族労働者が有効に利用されているのである。好況時に従業員を増やして事業の拡大を図った工場の多くが、不況時に倒産したという。

さらに笹部氏は約100坪の広さの工場を効率的に使用している。かつて庶民住宅の代表であった狭い長屋が、効率よく使用され、住居としての機能を十分に果たしていたことと同じである。また不要になった機械や道具類が残されることはない。

以上のようにハードとソフトの両面で、いわゆる「柔構造」を見出すことができ、そこに町工場の経営者のしたたかさを見ることができる。

(2) 柔軟な頭脳

「休みの日は思い切り遊び、たまには海外旅行にも行ってます」

近年、わが国では労働時間の短縮と関連して、心のゆとりを持つことが重要な課題としてクローズアップされている。笹部氏は何年も前から適切な判断をするために必要なものは柔軟な頭脳であり、そのためには心にゆとりを持つことが重要と考えてきた。そこで彼は、時々親しい仲間とヨットによるクルージングを楽しんでいる。クルージングは経済的にも時間的にも余裕がないとできない娯楽である。

また彼は10年ほど前から、尼崎市立田能資料館で銅剣を鑄造する体験学習会の

講師も務めている。これは約20人の子供を対象に鑄型に青銅を流し込む作業から仕上げまでを体験させるもので、モノづくりの楽しさを教えることが目的である。ここでも彼は子供たちとの交流を楽しんでいるようである。この催しは、同資料館の代表的な行事の一つになっている。

(3) 地域社会の一員として

「親父や私が仕事で苦勞し、また工場の周辺に住んでいる人には、なるべく迷惑を掛けんようにしてきたことや、ちょっとでも地元の役に立ちたいと頑張ってきたことを周りの人は見てくれていたと思ってます」

工場と住宅が隣接する神崎では、工場の操業に伴う騒音と塵に対して常に注意を払うことが求められる。夜遅くまで操業したり、これらの公害に対する設備投資を怠って地域住民の反発を招けば、工場の閉鎖を余儀無くされることもある。笹部氏は、これらの点については最大限の努力をしてきたという。また彼は工場に勤めて以来、地元消防団の一員として活動し、現在に至っている。一晩中消火作業に当たり、そのまま仕事に就くこともあったという。彼は常に地域社会の一員として行動し、地域の人たちとは親密な付き合いがなされている。気さくな人柄の夫人もまた同様である。

4 現代の日本産業社会への憂い

次に、現在の中小企業を取りまく状況の中で特に問題となっている点について語ってもらった。

(1) 後継者不足

「今、世間では、町工場は薄暗く埃だらけで、工員は朝から晩まで真っ黒になって働くだけ、そこで働くには頭は要らんとされているんじゃないですか。でも本当は町工場にも、いや町工場にこそ優秀な頭脳を持った人が要るんですわ」

その理由について、笹部氏は次のように説明する。先輩から基礎的な技術を習得するのに10年、それを基に自分で工夫しながら新しい製品をつくり出すのに10年、すなわち一人前の職人になるためには20年が必要である。その間怠ることなく研鑽を積み重ねていかなければならず、優秀な頭脳を持っていることが職人の条件の一つである。

笹部氏の指摘によると、戦後、学歴こそないが優秀な頭脳を持った人が中小企業の技術の世界に入ってきた。彼らは、残されていた戦前からの技術を習得し、質の高い製品をつくってきた。しかも真っ黒になって働くことを美德とする気持ちがあったという。このような人たちが町工場の高い技術を伝え、さらに発展させてきた。ところが高度経済成長とともに労働者の意識も変化し、優秀な人材は大企業に流れて、町工場は今、職人の後継者難という困難な状況に直面している。今までに積み上げられてきた技術を後世に伝えることができなくなってきたのである。

(2) 町工場が伝えてきた高い技術とは— 鋳物業の場合

「それぞれの工程ごとに名人といわれる熟練の職人がいるんだけど、どの工程の名人が欠けても、いい製品はできません」

鋳物部品の生産工程は、

- ① 木型の製作
- ② 鋳型の製作と合金の流し込み
- ③ 仕上げ

の3段階に分かれ、これらの工程ごとにそれぞれ独立した工場で作業が行われる。工場は阪神間の各都市と大阪市内に分布している。彼の工場では2番目の工程を担当していることになる。

木型をつくる工場では、材料の米国産の松を7～8年間乾燥させて油気と湿気を除去し、親工場から届く設計図を基に木型を製作する。誤差2mm未満の精度が要求され、熟練の製作技術のほかに、材料のどの部分を使用するかという点など豊富な経験と知識が求められる。

笹部氏の工場では木型と設計図を受け取り、そこに粘結剤を添加した砂を入れて鋳型を製作する。10年ほど前までの鋳型の製作は珪酸ソーダを使用して炭酸ガスを吹き込んだり、熱硬化性樹脂を添加して加熱する方法がとられた。しかし、鋳型が壊れやすかったという。砂は生駒山付近で産出した、粒子の揃ったものを使用していたが、現在はホワイトサンドと呼ばれるオーストラリア産の砂を使用している。材料はインゴットのメーカーから仕入れている。今、この工場では砲金やアルミニウム合金の部品を製造している。砲金とは銅9割と錫1割の合金で、

腐食や磨耗に強く、かつて大砲に使用したのでこの名称がある。鑄造した部品は仕上げの工場に送る。

仕上げの工場では、それらの部品の必要な箇所に磨きをかけて設計図通りの部品に仕上げる。これが親工場に送られて完成した製品に組み立てられる。

さて、この3段階の各工場には「名人」といわれる熟練の職人がいて、高い技術と誇りを持って仕事をしている。かつては親工場の設計者が、資材や工夫を要する箇所について職人に意見を聴きにくることもあったという。すなわち各工程に名人が揃ってはじめて質の高い製品の生産が可能になる。ところがこれらの名人といわれる職人が高齢化し、また前述したように後継者が不足しているのである。そして近年は韓国や中国、さらには東南アジアに大企業の依頼で名人が技術指導に出掛け、現地で部品が生産されることが増えてきたといわれる。笹部氏も、これらの地域から要請があれば技術指導に出掛けたいという気持ちがあるという。自分の技術が認められることは、誇り高い職人にとって何よりの喜びなのである。

(3) 高い質の部品が意味するもの

「以前、アメリカから入ってきたスクラップはいいもんだったけど、十数年前から質が落ちてきた。その頃がアメリカの自動車産業を日本が抜いた時期とちやいますか」

笹部氏は次のように言う。日本の大工場の多くは下請けの中小の工場と部品の納入の契約を交わして、それらの製造した部品を集めて製品に組み立てている。ところが近年、日本の賃金が高くなり部品の製造に要するコストが上昇したため、賃金の安価な東南アジア等で部品を製造し、それらを輸入して日本で製品化する企業が増えつつある。日本は原料を輸入して高い技術により高品質の製品を生産して、それらを輸出して繁栄してきた技術立国である。後継者不足やコストの問題により国内で部品の生産が行われなくなると、日本が誇っている高い技術が喪失されることは目に見えている。すなわち、いずれ技術を蓄積した他の国の製品との競争に破れることになる。

彼は、かつてのアメリカの歴史を、今、日本が歩みつつあると見ているのである。

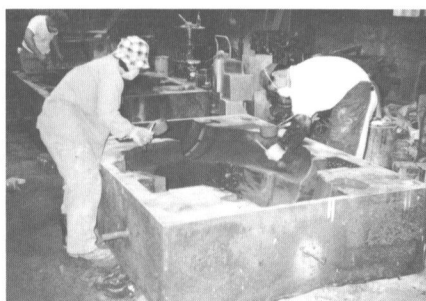
写真 鋳物工場と
鋳物の製造過程



工場外観



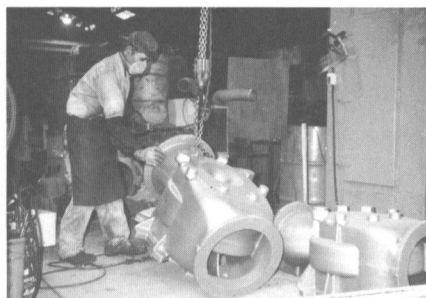
① 山積みされた木型



② 鋳型の製作



③ 溶解した金属「湯」を鋳型に
流し込む



④ 仕上げの工場に送られる
船舶用ポンプの部品

5 町工場の今後と行政に求められること

笹部氏の工場で働く職人はいずれも50歳を超えており、この工場が神崎の地で操業されるのは、あと10年程度であろう。ただし、前述したように笹部氏には3年前までこの工場で職人をしてきた6歳下の弟があり、彼は現在、宮崎県で同じ鋳物工場を経営している。笹部氏が父や先輩の職人から学んだ技術は、九州で活かされていくことになる。

彼は尼崎市内の鋳物関連の工場はやがてなくなるだろうと言う。その最大の理由は前述したように技術の伝承が困難になったことである。もう1点は土地価格の高騰により、新たに工場を建設することが極めて困難になったことである。そこで今、行政に求められるのはどのようなことだろうか。

(1) 技術の伝承

「技術の教科書はつくれても、実際に役に立つもんはできんね。でも最新の技術に関する情報は大いに参考になる」

若い人のために徒弟制度ではなく教科書をつくって技術を伝えたらとの私の質問に、笹部氏は即座に否定した。その理由は、習練により会得する技術の細部は、表現することが不可能であるからという。しかし、さらに高い技術を習得する際には最新の技術に関する情報が参考になり、この情報提供を行政が担当することが望ましいと指摘する。この点については、尼崎市では中小企業に対し、技術や人材などの情報をデータベース化して提供するシステムを検討しているところである。ただし豊富な情報量が望ましいことはもちろんであるが、企業が現在必要としている情報は何かという点を的確に把握する必要がある。

また技術の伝承は結局、人材の確保という問題に結びつく。伝統工芸など文化財として価値を認められた技術は国や県などにより保護が加えられているが、このような産業技術に対する評価は一般的に低く、関心を持たれることも少ない。兵庫県は金型業界の実情を高校生に知ってもらうために、まず工業高校の教員を対象に実技の講習会を開いている。そしてモノづくりの重要さはもちろん、その魅力を紹介するビデオを作成し、積極的にPRを行っている。

(2) 工場用地

「尼崎市内で新しく工場の用地を買うのは、もう無理ですやろなあ」

新しく工場を建設するための用地の確保という点について触れておきたい。交通機関が発達した現在、かつて尼崎市が持っていた交通至便の地という立地条件は喪失されている。また「工場の町、公害の町」のイメージは払拭されつつあるとはいえ、さらに努力が求められている。そこで、尼崎市では工場適地の確保や、住居系地域から工場系地域への工場移転を進めることにより産業立地の整備を図ってこうとしている。その一環として工業団地の建設を行っているところである。これらを推進していく一方、融資制度等への配慮が求められよう。

6 むすび

私は町工場の前を通ることはあっても、中に入って見ることはなかった。まして、そこで働いている人と話をするとは思ってもみなかった。今回の調査は、私がこれまで町工場に対して抱いていたイメージを大幅に修正させ、さらに私の社会的な視野を拡大してくれた。その意味でも、私にとっては大きな収穫であった。

それにしても、調査に先だって図書館等において町工場に関する文献を検索したが、工場数や生産額等の統計資料、及びこれに基づく分析を行った論文はあったものの、町工場の実態について報告されたものはほとんどなかった。私も含めて世間の関心が向けられなかったことがその理由であろう。今後、このような分野を取り上げた刊行物が増加することを期待したい。我々が学ぶべき多くの点を見つけることができると思うからである。

なお、この原稿をまとめていた最中の今年の7月16日付けの朝日新聞に、「車づくりにかけてたわが半生」と題してトヨタ自動車名誉会長の豊田英二氏が登場していた。その中で豊田氏は次のように述べている。「技術は紙に書いてあるかも知れんけど、多くの部分は人にくっついている。その人がやめちゃえば、技術が失われてしまう。そこから再出発しようとしても、新しくやるのと同じで非常に難しい」「コメをつくるのも一つのモノづくり。コメをつくらなかったら、明日からメシも食えん。モノづくりができなくなるような国はつぶれてしまうよ」。まさに笹部氏と同じ趣旨の発言をしている。日本を代表する企業の会長と尼崎市

の町工場の社長が同じ思いを抱いているのである。私は笹部氏が町工場から世界を見ていることをあらためて確信した。

最後に、今回の調査を快く受け入れて、ホンネの部分で語っていただいた笹部氏と夫人に心より感謝したい。